
龍の御使い

おでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の御使い

【Nコード】

N3887Z

【作者名】

おでん

【あらすじ】

神に飛ばされた先は異世界の龍の巢。え！？番いになれ？

龍の血と加護を得た主人公は龍神信仰の布教の旅に出る。

初執筆初投稿

考えすぎると投稿できなくなりそうなので、推敲はしても重ねない予定です。なので乱文乱筆誤字脱字不条理ご勘弁。書いてるうちにあらすじと変わる可能性あり。

第一章 神と龍とサラリーマン その一

龍の御使い

第一章 神と龍とサラリーマン その一

服部東司はっとり としは陶器製の小物を作る工場に勤めるデザイナーだ。と言えはいかにもかつこよく聞こえるが、その実はチーフデザイナーでもある若社長（二代目）のアシスタント・・・いや更に厳密に事実を言えば、

デザイナー5・雑用2・工場との折衝役2・出荷作業1

と言ったところであり、更に更に詳細に言えばデザインの仕事といても若社長の作ったデザインを工場のライン向けに最適化する作業が半分を占めており、自分の職種を人に説明するとき「デザイナーです！」と言い切るのに躊躇してしまい「デザイナー・・・とか色々やってます・・・」とつい言ってしまうような立場かつ性格だった。東司自身も、もう少しデザイナーらしい仕事がしたいとは思っていたが、小さい会社故にデザインに専念出来ないのがしょうがない事で有る事も理解していたし、現代日本では斜陽の陶器産業においてデザイン力と企画力で売り上げを持ち直している若社長の事は年下とは言え尊敬していた。だから若社長からの飲みへの誘いも、（はあ今日の飲みは愚痴だろうなあ・・・）と推測は付いていたが断らず付き合っていたのだった。

「いやゝ！ 本当に伊那商会はなめてるよ！ おかげで俺の苦勞も服部さんの苦勞も全部無駄だよ！・・・おねーさんお湯割りお代わりゝ！」

若社長が生中を二杯空け更に焼酎の二杯目を頼みつつ愚痴る。

「かなり無理矢理納期ねじ込まれましたね・・・まあ俺の苦勞はいいんですけど、社長がその仕様じゃ安定しないってあれだけ熱弁したにも関わらずですからね」

俺は三杯目の生中をちびちび飲みながら相づちを打った。

「そうなんだよー。時間が無いからって簡易発注で進めちゃった俺が悪いつちや悪いんだけど、あいつら」多少質が安定しなくてもそちらのせいにはしませんから！」とか言つといて、問題が起きたら担当は来ずに上司が出てきて」君の会社は問題がある製品を納める会社なのかね？」とか」担当は安定しないなんて話は聞いていないと言っている”

だぜ！？一瞬あの熱弁は俺の妄想だったのか！？と自分を疑ったよ！ポレナレフだよ！」

「まあ相手は大会社ですし、間接的とはいえうちにも定期的に仕事が来ている以上そこまであからさまにすつとぼけられると何とも成らんのが腹立ちますよねえ・・・あつ、ちなみにポルナレフです社長」

「レでもルでもポロナレフでもオーケー、考えるな感じる！通じただから正解！」

「まあ確かに意味は完璧に伝わりましたけどね・・・しかし何かしらの手で仕返しできないもんすかねえ正直釈然としませんよね」

「んー・・・」

若社長がどて煮（モツの味噌煮・中京のソウルフード）を頬張り咀嚼しつつ目を閉じ考え込むのを見て、俺も焼き鳥に七味を振りかけて食べる。

（塩が濃いな・・・七味はやめとけば良かったかな・・・昔は塩辛い位の方がうまいと思ってたけど最近少しずつ苦手になってきたな・・・）とか考えていると、

「もうちょつと粘ってどうにか条件引き出すくらいしかいい手はないなあ・・・むかつくなあ・・・」

苦い顔をして若社長が呟く。

「いつそ俺が心労で倒れた事にしてしばらく旅行にでも行つてくるから、その間に服部さんがそれをネタに交渉するとかやってみる？」

と社長がいたずらっ子のような笑い顔でこっちを見るので、こちらも演技がかつた感じで手を横に軽く広げて首を振りつつ応える。

「いやいや社長・・・社長がいないと会社が回りませんから。心を鬼にしてここは私が行きましょう！・・・経費で！」

「・・・じゃ病名は淋病ね！社内にも広めとくから！」

「いや・・・それは勘弁してくださいよ」

と二人で笑い合った時だった。

まさか笑い話の冗談が十倍増して現実になるとは思わなかったよ。

2011年11月25日（金） 21時25分

享年32歳

死亡原因：急性心筋梗塞

それが服部東司がこの世界に残した最後の記録だった。

第一章 神と龍とサラリーマン その二

第一章 神と龍とサラリーマン その二

思考はハッキリしている。いや、多分ハッキリしてるんだと思う。
だいいいな。

この状態は何だろう？ 寝てるのか？ 起きてるのか？ なんだ
かハッキリしません。

まず体が動かない。体の状態としては寝てるんだと思われます。
体の裏側に何となく接地感がありますから。とはいえその感覚は非
常に薄い物で、その上、体は動かないときたまんです。金縛りだろ
うか？どきどき。つーか俺今呼吸しているのか怪しいんですが。笑
い事じゃないけど（笑）

体の感覚が非常に薄いので単に分らないだけかもしれないけど
ね。全身麻酔されているのだろうか？深く考えるとパニックになり
そうな感じだし、思考は（多分）正常だから問題ないのだろうとそ
の問いに対して眼をつぶる。

そんな訳で心の眼は一旦閉じたけど肉体的な眼はずっとつぶって
ます。てか、眼がおかしくなっているという可能性にも眼をつぶり
たいです。先ほどから眼をつぶっているから見えないのか、眼を開
けていても見えないのか、判断が出来ません。

そして聴覚これが今のところ一番頼りになりそう。と言うのも先
ほどからなにやらぼそぼそと、しかし小さい音量の割には明瞭に声
（音？）が聞こえますからね。

ん？なんで明瞭なのに声か音が分からないかって？

理由は簡単。あからさまに聞いた覚えのない感じなんですよ。数
人で入り乱れて三倍速のスカッ トマン・ジョンを歌ってるという
のが、私の感想です。ええ何が何だか・・・何となく声っぽい印象

はあるんですが、微妙なところです。

ちなみに味覚嗅覚はまったく感覚がないと来ました。まさに天舞宝輪。これだけ感覚が封じられてれば金色戦士にも劣らぬ力が手に入りそう。転職するか？鳳凰戦士。いやぁ一度は言ってみたいよね。”戦士に一度見た技は二度とは通用しない！”。いやぁ、とは言いつつ結構何度も同じ技食らってたよね彼。言うならばあれも一種のフラグなんだろうか……。

いやそんな話はどうでも良い。今一番の問題は鳳凰戦士に転職するかどうかだ！

どうする！？ア イフル！あの犬可愛いよなぁ……所で犬や猫の可愛さって小さいからこそだと俺は思うんだ。確かにあの犬のつぶらな眼はもうたまらんですたい！なんだけど、もしあの犬が二メートルのサイズだったら、ぶっちゃけ怖いだろう。あの眼もつぶらな瞳というより表情の感じ取れない不気味な瞳になっちゃう気がするのさ。つまり何が言いたいのかというと身長180の俺も身長50センチくらいなら可愛……。いくないか。不気味なだけか……。なるほど俺にロリコンの素養が無い事が分かった。今風の言葉で言うなら、ロリコンさんがYESロリコン、NOタッチだったから、俺はNOロリコン、YESタッチだな。つまり俺はロリコンじゃないから触ってもおk。うへへ、夢が広がりまくりんぐ。ん？いえいえ、ほんと自分ロリコンじゃないっすから！自分真面目っすから！本気視と書いてマジメっすから！。見るだけっす、本気で見るだけっすから！YESロリコン、NOタッチですから！。っーか32から見ると女子高生あたりでもロリコンだよな。

いやそろそろ話を本題に戻そう。

今俺が考えなくてはいけない事は鳳凰戦士に成るか否かの筈だ。まず俺が鳳凰戦士に転職するには五感を封じる必要がある。つまり触感が封じられていないと、俺は鳳凰戦士になれない。

鳳凰戦士になると、いやでもNOタッチ状態。

はい。転職しない事決定！

ふう・・・危ないところだった。もう少しで孔明の罠にはまるどころだったぜ・・・さすが諸葛孔明。中国三千年の罠だったな・・・。

さて、と・・・なんやかやと眼をそらしてみたけど、やっぱり五感が復活しねー・・・三倍速スカッ トマン・ジョンは相変わらず聞いてると頭おかしくなりそうだし。

うがあああ・・・

いや待て落ち着け落ち着くんた俺。まずはもう一度認識把握だ。

名前は服部東司三十二歳。

年齢は・・・だから32だよ。

身長180m 体重80g。

スリーサイズは上から82・62・78位が遥か遠き理想郷。

株式会社 陶器のデザイナー（筆者は とか（株） x

みたいな社名の会社をリアルで見た事あるけど、 陶器は大丈夫だと良いなあ・・・）

年収七百万。・・・程欲しい。現状だと中々貯金が貯まらないんだよなあ・・・。

いやその話は取り敢えずどうでも良い。いや良くはないか、いや良い。良いっていつてんだよ！虚しくなるからもう止めてください。お願いします・・・。

さてさて、えーと何だっけ・・・ そうだ社長と飲んでたんだ。んで急に胸が痛くなつて・・・やべー・・・俺ジョッキ倒した記憶があるわぁ・・・ガシャーンって音も記憶にあるから、割っちゃったなこれは・・・いや、それも良くはないけどほんとにどうでも良

い。

えーと・・・確か胸がどんどん苦しくなったんだ・・・それで倒れて・・・

げっ、俺本当にまずいのか！？・・・うわっどうなってんの！？
これ夢じゃないのか？

おっ？ あれ？ おおっ！？ なんだか目の前が明るくなってきた！？

龍歴27012年

聖カイン歴815年11月25日 21時25分

神の右手により転生

転生後最初の言葉 「え？ドラゴン？・・・やっぱり夢か・・・」

それが服部東司が惑星クラチカに残した最初の記録だった。

第一章 神と龍とサラリーマン その二（後書き）

12月15日改訂しました

第一章 神と龍とサラリーマン その三

第一章 神と龍とサラリーマン その三

朝のまどろみは、ふっわふわで蕩けるように甘い。

言うならば、蜜の川のせせらぎを大きな綿菓子に寝転がって流れのままにたゆたう様な物だ。手を伸ばし黄金の流れを掬い取り、指の間からさらさらと川に返す。

そんな美しき幻想の世界。

蝶よ花よ妖精よ。そんな存在しか許されない世界。
ならば人は何故この世界に永住しないのか。

それはきつと川を覗き込んだときに気づくからだ。自分という存在がこの世界における唯一にしてもっとも許せない異物で有る事だが、例えこの身が異物であっても今はもう少しこの世界にお邪魔しよう。

今ならきつと許してもらえるはずだ。

なぜなら・・・

起きたくないんだよね。むにゃむにゃ。

東司は非常に寝起きが悪かった。少しでもまどろみを楽しむために会社まで自転車です5分、車で2分のアパートに引っ越したくらいの筋金入りだった。

しかしそんな睡眠におけるクライマックスでありハッピーエンドを邪魔する敵の魔の手が迫る。

「あ・な・た？ 起きてください？ 朝食の用意が出来ましたよ

「？」

”敵の魔の手”を訂正。

むしろクライマックスがフルスロットルでハッピートゥルーエンドな模様。

うおおお素晴らしいいい・・・

そう・・・思えば、今まであまり多くはないが付き合った事のある女性は

「ちよつとー、そろそろ起きてくれないと遅刻するんだけどー」とか。

「ご飯は交互でって私言ったよね？」だったもんな。

いや、決してそれがおかしいとは思わないが、ほら・・・有るじやないですか、男の夢っていうか、お約束っていうか。正直あざとい台詞だと分かっていても逆らいがたい本能を揺さぶられる一撃というか、ゆさゆさ揺らされた所をがばりんちよの朝から遅刻上等！YESモンキーマジックツツツみたいなさっ！

よし、完全に目も覚めた事だし、如意棒もReadyだし、やってみるか！ ゆさゆさがばりんちよ！

「ぬう・・・いつもの事ながら中々起きんの・・・まあ寝かせておくかのう」

え？・・・ええええ・・・せつかくスーパーがばりんちよタイムの予定だったのに！？

シヨックだ・・・鬱だ寝よう・・・

「というかじゃ、起きとるじゃろ？
主様。ぬしさまそれだけ鼻息が変わったらばれじゃぞい。」

まあそうだよな。

東司は「うい・・・おはよう、ゆらさん」と応えて体を起こした。目の前には藍色の地に白色の花模様、薄い桜色の帯という着物を着た美しい女性が畳に膝を揃えて腰を下ろしている。

東司は布団に座ったまま頭を掻きながら、その女性を改めて眺める。

見た感じの年齢は20代前半くらいだろう。身長は170cm程、黒髪は長く腰まであり非常に艶やかで、正に濡れ羽色と言われる物だろう。また顔は小さく非常に整っており、少なくとも日本人であれば、よっぽど特殊な嗜好の持ち主でない限りは美人、いや信じられないほどの美人と評するのは間違いない。

体つきは出るところが出ており、以前は82・62・78位が東司の理想だったが、それよりも少し胸は大きく腰は細いんじゃないかと思われる。とはいえ今となっては宗旨変えしているが。

ふっ・・・所詮、理想なんてより上質な理想が現れれば塗り代わってしまうものさ・・・

人が逃れられぬ、悲しきサガと言うやつだな・・・うむ仕方がない・・・

「おはようじゃ主様。

お食事にされますか？

お風呂にされますか？

そ・れ・と・も・・・」

お？ おおおお！？

朝やるテンプレではない気もするけど、

キタコレ！？

どっきどきのわつくわく！？

「トペ・コン・ヒーロ？」

「いや、その理屈はおかしい」

「むう？ なんでじゃ？・・・主様の知識によると、朝起こしに来たおなごは「おつきろー！！」と言いつつ飛び乗る物じゃと思っ

たんじゃがのう・・・」

「絶対に俺の知識の中に前方一回転して飛び乗るおなごはいない！」

小首を傾げながら、「ふむ、そうじゃったかの？」なんて呟いている自分の奥さんを見ながら、自分の知識だから自業自得とはいえ、なんでこんな明らかに余分な知識まで身につけるかなと嘆息しつつ、知識を与えた時の事。つまり一年前この世界に召還された時の事を思い返すのだった。

第一章 神と龍とサラーマン その三（後書き）

12月17日改訂

第一章 神と龍とサラリーマン その四

第一章 神と龍とサラリーマン その四

起きたら目の前に全長30センチ前後のちっこい東洋風の龍が浮かんでいた。

「え？ドラゴン？・・・やっぱり夢か・・・」

東司は寝起きが良いわけではないが、それは単にぐずぐずと微睡むのが好きなのであって、寝ぼけるタイプと言う訳ではない。

（まあぶつちやけ、起きれないタイプと言う奴であり、人はそれを駄目人間と言う）

なので「夢か」と言いつつも、思考自体は普通に回転し始めており、夢と言うにはあまりにもハッキリしすぎている事に戸惑う。

取り敢えず龍から眼を離し、周りを見渡してみる。

どうやら畳敷きの和室っぽい部屋で布団に寝ていたらしい。

和室っぽいというのは高い天井にシャンデリアがぶら下げられているからだ。

ここはどこのかぶれの家だと思わず苦笑した。

その時だった。

今まで全く動かなかった龍が突然動き始め、右腕に咬みついていた。

「うわっ、いたっつー!!」

軽いパニック状態に陥りつつ、左腕を動かして龍を腕から払おうとするが、うまく振り払う事が出来ない。というか、龍が咬み付い

ている腕ごと動いて避ける為に触る事すら出来なかった。

三度目のチャレンジが失敗に終わり、普通に振り払うのは難しい、何か方法！？と思ったとき、唐突に腕から痛みが無くなった。龍が咬むのを止めたのだ。

龍は部屋の入り口の当たりまで、すいーっと離れていく。

それを横目に見ながら咬み付かれた場所を確認した。

二つの小さな浅い穴のような咬み痕。ただし穴が空いている割には僅かに血が滲んでいるだけだ。

毒！？ 毒はあるのか！？ いや、蛇の毒は咬まれた直後から激痛があるって聞いたぞ？

夢？ やっぱり夢なのか？ いや？ 痛かった。さっき確かに痛かったぞ？

夢なら痛くないとは限らない？ そうだほっぺただ。つねってみるか？

いや、咬まれた痛みの方がほっぺより上だろ。

より痛い事？ いや、痛いのは嫌だな。他になんか無いか？

と焦りつつ自分の思考に潜っていると、急に声を掛けられた。

「初めまして、服部東司様。」

咬み痕から目を上げると部屋の入り口に和服を着た女性が正座し、畳に指を突きながら頭を下げていた。

「え！？ あ、どうも！・・・えーと・・・初めまして？・・・えーと・・・」

「私は名前をユーフラン・ライエン・ユラユラと申します。」

女性は顔を上げ微笑みつつ名乗る。

腰まで伸びる艶やかな黒髪。十二単ではないが艶やかな着物姿。

姫という言葉が自然と思い浮かんでくる。

「あ、どうもご丁寧に・・・えーと俺・・・じゃなくて、私は服部東司で、じゃない、と申します」

正直ちよつと狼狽える。さつきから展開が急すぎるし、夢なのか何なのか訳分らないし、女性はすごい美人だし！！（ここ重要）
「つかすごい美人だし！！（以下テンプレ）」

一万ボルトだけと百万ボルトで、最後の天使がアリスな訳ですよ。
ハイスイマセン。自重しよう。

パニックってるな。なんだかテンションの浮き沈みが激しい。
落ちて着け落ちて着け・・・

「えーと、済みません。ユー・・・えーと」

「ユーフランとお呼びください。服部様」

「あ、はい。ユーフラン・・・さん。・・・これは夢・・・じゃなくて、えーと・・・ここはどこでしょうか？」

状況と展開が理解の範囲を超えており、何を聞いたら良いのかが浮かんで来ずに、「つつい」何を聞いたら良いでしょう？」と聞くところだった。やばいやばい。

「はい。服部様のご質問には全てお答えさせていただくつもりですが、まず最初に二つ謝罪させていただきます。」

「え？謝罪？・・・ですか？」

「はい。一つは、先ほど腕を咬んだ事をお詫び申し上げます。」
「へ？噛んだ？・・・何の事だ？ そんなポーナスタイムあったっけ？」

「先ほどの龍が私でゴザイマス。服部様とお話しさせていただくのに必要でしたので、血をいただく為に咬ませていただきました。」

サキホドノリユウ??

・・・

先ほどの龍が私！？

え！ええええ！？

はあ！？ 何それ！？ ファンタジー！？

やつぱり夢か！？ 夢なのか！？

「血をいただく事で言語と共にその他の知識も授かりました。この姿も服部様の知識を参考にさせていただいております。」

「あー・・・おかしいと思ったんだよ。つか、なんなんだろこの夢。きれーなおねーさんは分かるけど、龍が出てきて咬まれるとか、俺はフロイト先生に何を求めてるんだ？ 自分がわかんねー・

・・・」

「服部様。混乱されるのは分かりますが、これは夢ではございません。」

ユーフランさんのまっすぐな目に魅入られ、一瞬にしてパニック状態が解除される。

それは彼女が人間ではないという事を告げているにも関わらず、その目は嘘をついていないと信じられる、信じさせられる目だった。

そして彼女の綺麗な唇から、決定的な壊滅的な事実が告げられる。

「ここは・・・異世界でございます。」

・・・

イセカイ？

・・・

伊勢かい？

なんちゃって

「うはははっ、うまい事言っただ！！ 山田君座布団持ってきてー
」！

あーはっはっは

パニック復活！

もう訳わかれ・・・。

第一章 神と龍とサラリーマン その五

第一章 神と龍とサラリーマン その五

その昔、知り合いが”踊る阿呆に、見る阿呆。同じ阿呆なら踊らにや損々”と言う有名な音頭に対し、どちらにも参加しなければアホじゃないと自慢げに言い放ちましてね。

それを聞いて、よしんばアホじゃなくても、ド阿呆って話かもしれんべと思った訳です。

ド阿呆はいかんよね、ド阿呆は。

人として、アホに為るのは良いけど、ド阿呆に成るのだけは避けないといけません。

なので、ド阿呆にならない為に、

服部東司。踊ります！！

脳内が阿波踊り会場になり始めたその時、柔らかく温かい物に顔を包まれた。

いつの間にか目の前に来ていたユーフランさんの胸に優しく抱擁されていたのだ。

「どうぞ落ち着いてください。」

ユーフランさんは優しくそう言いながら、抱きしめたまま頭をゆつくりとなでてくれる。

彼女に頭を撫でられる度に少しずつ脳内の阿波踊り会場が撤去されていく。

残されたのは祭りの後の様なしじまと頭を撫でる優しい感触だけだ。

こうされていると、普段は忘れていた今は亡き両親の事を思い出
す。

小さい頃、俺は母さんに膝枕して貰いながら頭を撫でられるのが
大好きだった。それを見て親父が東司は小学生になっても甘えっ子
だな。と笑ってたっけ。懐かしいな・・・

今は懐かしいだけで涙が出てこない程にはすれちまったけど、こ
の心が暖かくなる感覚、いつまでも撫でて欲しいと思ってしまっ
たのは小学校から変わらないな。男は基本マザコンだという説がある
しいけど、今だけは否定できん。やっぱり男はいつまでもたってもマ
マのおっぱいから離れられない生き物なのかもしれんわ。

・・・ん？・・・おっぱい？

・・・あるうええ？・・・この人ブラして無い事無い？ 事無い
事無い？

さて、なんか落ち着いたのは良いけど、今度は別の意味で落ち着
かなくなりそうだ？

いやー、だってですよ、プツンプリンしてたら、ほわわんプリ
ンで、それがいつの間にかプリンプリン。

何をいつてるのか・・・（中略）・・・味わったぜ。

プリンだけにな（どや）

いかんいかん、別の意味で混乱しそう。

いや、ある意味既に混乱しているわけだが、まだ大丈夫。ぷっち
んプリンで言えば、逆さまにはしたけど、まだぷっちんしていない
状態？

何かの拍子にお皿に落ちてぶるるんぶるるんしたら、もう食べち
やうしかなくなっちゃうから早く元に戻さないと！

大体がだ。彼女は厚意でしてくれてるんだ。もっと紳士・・・じ
やない（最近の紳士には変な意味も付加されてるしね）真摯な気持

ちで応じないといけません。

「ありがとうございます。もう大丈夫です。落ち着きました。」
御礼を言ってユーフランさんの精神攻撃から解放して貰う。残念
無念。

彼女は少し心配そうな顔をしながら、少し離れた位置に座り直した。

というかさすがにそろそろね。

起きてる阿呆に、夢見る阿呆。同じアホなら馴染まにゃ損々。

粟は食っても泡食うな。

ってね。

そろそろ認めざるを得ないだろう。

これは夢じゃあない。こんな現実感のある夢はあり得ない。現実・

・なんだろう。

先ほどの彼女の言葉を思い出す。

異世界・・・ね。真実なのか担がれてるのか、どちらにしても、
とにかく話を聞こう。

まあ龍にしろ、この美人さんにしろ、これだけ手間掛けて俺を騙
す意味は無いだろうから、本当に異世界なんだろうけどな。

「何でしたっけ？ あー・・・咬んだ。とか言う話でしたね。血
を飲む事で知識を得る。でしたっけ？」

「はい、テレパシーとか念話と呼ばれてる能力も使えるのですが、
共通の言語が無い以上、概念のやりとりになってしまいますので。
・俺・お前・頭・丸かじり・うまい、というやりとりになります
ね。」

あどけない顔で説明してくれるユーフランさん。

つか概念の説明に、何故それを選んだし・・・ちょっと怖いん
ですけど。

ギャップ萌えしている俺を置いて話が進んでいく。というか、俺

が進めていく。

「テレパシーが使えるんですか!？」

「はい。……とは言いますが、東司様の知識にある物とは少し違い、能力を使う側が一方的に伝える事が出来るだけで、東司様の心を読む事は出来ません。」

「ああ……そうか、そう言えば龍？ですし、特殊な能力があつても不思議は無いのか」

ユーフランさんは一息ついて、正に”にっこり”という言葉がぴつたりな笑顔で話を続ける。

「ですので、先ほど私が頭を撫でさせていただいた時も、何を考えておられたのかは分かりません。もっとも鼻を長くされてましたので、推測は付きますが。」

ギャー!!

ばれてーら!？ やっぱり紳士がまずかったのか!？

いや!？ 落ち着け! (どや) までは推測されない筈だ!

「いえいえ、紳士ですから、そんなとんでもない、おそらく混乱してたのでしょう。はははっ」

「ちなみに、血をいただいた時に東司様が知って見える知識の他に、東司様の趣味嗜好、細かに申し上げますと閨の趣味まで伝わりましたので、お隠しいただかなくても大丈夫ですよ。」

な ん だ と ？

いやいやいやいや、やっぱり幻覚だ。

こんな綺麗な娘が女の子な訳がない。

ちがーう!!

こんな清楚な姫が閨の趣味とか言う訳がない!! だ。
てーか、ゆるちて……

「あ、もし信じられないようでしたら、秘蔵の自慰用のお宝本の

内容ですとか、前の彼女さんに振られる原因になった、プレイの内容ですとか、お話しいたしますが。」

こちらは怒濤の如く押し寄せる衝撃に耐えるのに精一杯なのに、ユーフランさんは、更に矢継ぎ早に攻めてきます。助けて・・・と言いますかですね。

「もしかして・・・それがユーフランさんの地ですか？」
ユーフランさんがにやつと笑う。

「まあ、そうじゃな。厳密には違うのじゃが、これからはこれが地じゃ。だから儂に遠慮する必要はないからの。、畏まった物言いをせんで、普通に喋るがよいて。」

唐突にユーフランさんが砕けた口調になる。いや、くだけたつつか、何なんだその口調は。

あれ？ え？ もしかして俺の知識から取った口調なの？

「ちなみに容姿は東司の好みにぴつたりの筈じゃ。んでもって口調は東司殿が持っていた人型の龍神のイメージを流用しておるの。とはゆうても、何人ものイメージを持っておったので、はいぶりつどと言うやつじゃがの。」

・・・

正直オーバーキルと言う事なのか、幸か不幸かパニック状態には成らないけど、

えええ、なにこれ・・・

言いたい事はいっぱいあるが、まずはこれだけは聞かない訳にはいかない。

「あんたがSっぱいのも俺の趣味なの？」

「ふむ。これは趣味というか東司の持っておる龍神のイメージによるところが大きいのかのう。とはいえじゃ、東司はお馬鹿なノリに付き合ってくれるタイプが趣味じゃから、そこは押さえておるよ」
あー確かに・・・

確かにそうなんだけど・・・

「後、東司の趣味に合わせて、夜はM気味じゃ」

おっきい胸を張ってどや顔するユーフランさん。

お願いですから性癖はばらさないで・・・

もうお腹いっぱいです・・・

両手を床に付き、うなだれる東司。

その姿は横から見るとユーフランに土下座しているように見えたとか。見えなかったとか。

第一章 神と龍とサラリーマン その六

第一章 神と龍とサラリーマン その六

「なんじゃなんじゃ東司。呆けおつて。せつかく儂が許しを請うておるのじゃ、『許してほしけりや俺の物になれ』くらいは言わんかや。」

ユーフランさんはにやにやと笑いながら、うなだれている俺をいじってくる。

「つーか驚愕の事実だ。」

「俺、謝られてたんだっけ?・・・」

いや、ホントにそうだっけ? なにかが違ってるような・・・

「んむ? そうじゃよ? 今なら謝罪を盾に、獣の様に体をむさぼられても致し方なし。と、思うとる程じゃよ。・・・じゃがの・・・せめて最初くらいは優しくしてたもれ?」

神妙な顔をして上目遣いでこちらに流し目をくれるユーフランさん。

うつ・・・可愛いやんけ・・・

でもね、確かに可愛いのは可愛いんだけど。

「口元だけにやけてんぞ。」

「おおっと、失敗失敗じゃ」

ユーフランさんは口元に手を当てて、上品にクスクス笑う。

わざとやってやがんな? 正直分かつてはいても可愛いと思うちやうのが悲しい・・・。

俺は嘆息を漏らしつつ言った。

「まあ謝罪は良いよ。体も何も求めません。」

正直もつたいない気もしないでもないけど。状況が状況だし、相手は神様だしで、とてもそんな気にならんのですよ。・・・いや、

本当にもつたいねえ・・・

もつたいないお化けが脳内に化けて出る前に話を進めよう。

「それより確か二つ謝罪があるとか言ってた気がするけど、まだ何かあるの？」

「んむ・・・東司が、何故この世界にいるのか、と言う話じゃ。」

「ああ、そういえば・・・て事は、ユーフランさんがやったって事かな？」

「残念ながら違うの・・・。そんな事がはいはい出来るのは神だけじゃよ。」

「へ？・・・あれ？さつき龍神とかなんとかって、言ってますんでしたっけ？」

「んむ。つまりあれじゃ、言うならば、僕は下級神じゃ。で、東司を連れてきたのが絶対神ということじゃ。まあ、絶対神とはゆうても、更にその上があるのかどうかは分からんがの」

あー・・・神様にも階級があるのか・・・まあ、有っても不思議は無いか。あれ？でも待てよ？

「でもそれなら、ユーフランさんが謝る事じゃないんじゃ？・・・ああ、上司の失敗を押しつけられた？　みたいな物ですか？」

うわあ・・・神とは言っても中間管理職みたいな苦労があるって事なんかな・・・世知辛いなあ・・・

「というか、やった当人・・・いや当神？は来ないんですか？」

「まあ来んじやろうなあ・・・というかじゃ、僕もあつた事もなければ、話した事も無いからの」

「はあ？・・・あれ？・・・　済みません。良く聞こえなかったの、もう一度言ってもらえますか？」

「つまりじゃ、人にとって僕は神様じゃ。ここから動かずとも人の営みを知る事も出来るし、奇蹟や大洪水を起こしたりも簡単じゃ。でじゃ、その神たる僕から見て神様ということじゃ。一応、神がある事だけは分かるし一方的に話しかける事は出来るがの。・・・まあ、僕が人からの呼びかけに応えなかった様に、一度も見た事も声

を聞いた事も無いと言う訳じゃ。こう言うのも子は親を見て育つと言うかのう。」

まあ僕は人の親ではないがの、と呟くユーフランさん。

「なるほどね。・・・あれ？　じゃあ俺をこの世界に連れてきたのが絶対神だつて何で分かったの？」

「んむ。それは三つ理由があつての。一つは東司が何の予兆も余韻もなく、僕の目の前に現れたからじゃ。単純に突然現れたとゆうとるのではないぞ？　仮にじゃ、人や僕と似たような存在がそれを行つたとするじゃろ？　すると東司が現れる前には予兆が、現れた後には余韻が生じるのじゃ。そんな事が出来るのは僕より遥かに上位の存在、つまり神の御技じゃろつということじゃ」

なんつーか、数多のフィクションに埋もれて育つた世代だし、大体は理解できるな。

「しかもじゃ、東司がこの世界に現れたのはこの場所なんじゃが、その時ここは単なる水の中じゃつたのじゃ」

「水の中？」

「んむ。水の中。つまり水中じゃ」

「そのまんまやん！　いや、そうじゃなくて」

俺は周りを見渡す。部屋に窓はあるが、全て障子で覆われている為、外を見る事はできないが、特に水浸しだった様子はないように見える・・・

「この家は東司が来てから建てたのじゃよ。」

「建てた？・・・え？　どうやって？」

「東司と似たような見た目の種族の住む家を参考にしての、マジカル、マジカル、るるるる、じゃ」

それで良いのか神様・・・

「まあそんな話はどうでもいいじゃろ。見たければいつでもやってやるしの。」

いや？　結構どうでも良くないぞ？

黒髪ストレートでほんきゅっぽんなマジカル少女・・・

すっごい笑えるか。すっごいセクシーか。

うわぁ・・・すっごい見てみてえ

俺が脳内のユーフランさんに、カボチャみたいなミニスカフレアスカートを穿かせている間も話は進んでいく。

「でじゃ、当然水中じゃから、本来なら東司は溺れておったはずなんじゃが、東司がこちらに來た時に体全体を包み込む特殊な力場に覆われておつての、それで溺れずに済んだ訳なのじゃ。・・・む、東司。聞いておるのかの？」

脳内の想像がティロってフィナーレを迎え始める当たりで妄想から呼び戻される。

「ん。・・・もちろん聞いてます。てーか俺にそんな力はないよ？ ふつーに一般人だったし」

「怪しいのう・・・魔法少女辺りが怪しい気がするんじゃがの・・・」

うぐっ・・・やべええ、つーか、やりにき・・・

冷や汗を流す俺をジト目で見ながら話を続けるユーフランさん。

「まあ東司のゆう通りじゃ、東司の力と言う事は、おそらくないじやろう。神たる儂の力すら一切通さぬ、正に絶対防壁じゃったから。」

「ああ・・・だから絶対神が関わってると？」

ユーフランさんがゆっくりと頷く。

「ちなみにじゃ、東司がこの世界に現れてから、七時間その状態で寝ておったよ。おそらく中では生命維持に必要な要素は何らかの形で補給されとったんじやろうて」

それこそ正に神のみぞ知る。じゃ、とドヤ顔するユーフランさん。いや、そんなにうまくないから・・・

「そして最後の理由じゃが、・・・同時にこれがもう一つの謝罪せねばならぬ事なのじゃ」

漆黒の瞳で俺の眼を見つめながら、ユーフランさんの唇が言葉を紡ぐ。

「儂が神に頼んだのじゃ」

「儂を終わらせるか、儂を終わらせれる者を送ってくれ、と」

俺を見つめるその瞳は、いつの間にか深紅の龍眼へと変わっていた。

第一章 神と龍とサラリーマン その七

第一章 神と龍とサラリーマン その七

小説家になろう！

「へー面白いな。こんなの有ったんだ。」
彼はラノベが好きだ。

このサイトを見つけたのも、某ラノベ出版社で”ウェブで大人気”というポップ付きで出版された小説の続きをいち早く読もうとして、たどり着いたのだ。

比較的読むのが早い範疇に入る彼が、ランキング上位や文字数が多い小説をあらかじめ読んだのは約一ヶ月後。

もちろん彼の趣味に合う小説。合わない小説。あんまり趣味じゃないかなー、と思いつつも、ついつい展開が気になってお気に入りに入れていく小説。諸々有ったが、色々な世界。色々な設定。色々なキャラクター。そう言ったものに大量に触れる事が出来るのは、来月出る新刊の前に既刊を読み返したりお気に入りを読み返したりで読書欲を解消していた彼にとって、新鮮かつ刺激的な、そして何より幸せな体験だった。

人は刺激になれると、刺激が無い状態に不満を感じる様になる。
例えばそれが本来の状態であつてもだ。もちろん一・二ヶ月そのまま我慢していれば元に戻ったのだろうが、何の因果か彼の脳裏に「自分でも書いてみるか？」という（無視すりゃいいのに）考えが湧いたのだった。

異常に設定に凝るのは中二の証と言うが、「中二（笑）」と笑うのは高二病、「高二（笑）」と笑うのは大二病、どれも楽しく読め

ばいいじゃん」と思っている彼は中二上等とばかりに設定を考え始めた。正しく中二の鏡だ。

”小説家になろう”で、彼が読んだのはファンタジー系が多く、続きを待っている事で飢えている彼が「なら俺も書く」とばかりに選んだのもファンタジー系だった。

んー、異世界に転生した男が神に貰ったチート能力で暴れまくる王道ものにするか。王道こそ正道だよなー。

あー、でも某幻想碎きさんみたいに、通常的能力自体は普通で、一つの反則能力で活躍する感じのが良いかも？ 全く同じって訳にもいかないし、どうするか・・・
神の力の内、数種類が使えるけど、使ったら倒れちゃう。とか良いかもな。

うん、強力だけど、弱点にも成って良い感じ。

あつ、でも倒れたところを狙ってくる敵とか出した時、フォロ－出来る能力を考えた方が良いかな？ んー要検討にしよう。

次は魔法だな。読んだ中だと取り敢えず四大元素に光・闇、あとは時と幻って設定も多かったな。ついでだから、なんか隠しも入れるか？ いや、逆に絞って見るのも手かもしれない。

取り敢えず四大元素をググるか。

”古代ギリシャのタレスは万物の根源に「アルケー」という呼称を与え、アルケーは水であるとした。その他、アルケーは空気であると考えた人、火であると考えた人、土だと考えた人たちがいた。

”（出典ウィキペディア）

ふむ・・・いつそタレスさんに従って、四つに絞っちゃう方が一周回って良いかもなー。

場所としては基本地球だな。世界の名前はテラ？ガイア？んーありがちなな。やっぱオリジナルにしたいな、これも要検討と。

じゃあ、種族はどうしよう。人間・エルフ・ドワーフ・おっと、

忘れちゃいけないダークエルフだな。あとは・・・リザードマンに、妖精も入れるか。なんか他に無いような種族をいずれ出したいなー。これも要検討だな。

竜もだすとして、どういう立ち位置にするかなー。敵？味方？んー・・・

設定を考える時間は楽しかった。考えれば考えただけ、面白いと思ってもらえると思える設定や展開を思いつけたと感じた。

充実した、集中した、そして、とてもとても幸せな時間だった。

そして彼は六日間掛けて世界を考え、一日の休みを置いて、勇者の冒険談に取り掛かる。

初めて書く小説。町の描写、行動の描写、会話の描写。それどころか文末一つとっても、読むと書くでは大違いだと感じた。

読んでただけの時は簡単そうに見えてて気づかなかったが、難しかった。苦しかった。自ら読み返せば読み返すほど、心は折れていく・・・。

そして彼の挑戦は第五話で終わった。

第六話として勇者は帝国を倒し、奴隷として扱われていたダークエルフを解放し、邪教信者として亜人間を弾圧していた宗教を正し、元の世界に帰りました。という投稿を最後に掲載終了したのだった。結局、彼の考えた設定の多くは明かされる事も無く。そのうち出すつもりだった凝りまくったつもりの、古えの龍の存在も複線を匂わせただけで、結局日の目を見る事は無かった。

掲載終了後、神は読むだけの人に戻った。

それは二万六千年ほどの間、待ち続けていた。

特に何をするでもなく、宿命づけられた邂逅の為に。

何故それが宿命なのか、分からない。知らない。興味がない。

ただ、感じるだけだ。自分を縛るそのルールを。

宿命というルールにも二万六千年と言う長き時にも、何も感じなかった。

何故なら宿命の時まで感情を持たないルールだったから。

ただただ、ユラユラと湖にたゆたう。

だが、宿命の時が来たにも関わらず、宿命の邂逅は訪れなかった。邂逅無きまま更に千年が過ぎた。

ルールから外れたその元に訪れたのは宿命とは関与しない者だった。

本来なら彼等はそれの元に辿り着く事は出来ない筈の者達だったが、だが千年の月日が、彼等に神のルールに沿ったまま神の思惑を飛び越えさせる力を与えた。

そして彼等は宿命の者が与える筈の名前をそれに与えた。

湖底にただよう貴婦人。

ユーフラン・ライエン・ユラユラ、と。

（貴婦人）・（湖底）・（ただよう）

そして、ユーフランは自我を得た。

第一章 神と龍とサラリーマン その七（後書き）

12月24日改訂

第一章 神と龍とサラリーマン その八

第一章 神と龍とサラリーマン

その八

差出人

件名

宛先 (自分)

あれーなんだろ？ このメール。

彼がサンダバを立ち上げメールをチェックすると、見た事のないメールが届いていた。

いや、訳の分からないメール（おそらくはフィッシングメール）自体は毎日大量にくる。例えば差出人の表示が自分のメールアドレスだったり、件名が”この間はとうも”だったり、色んな手で興味を持たせようとしてくるメールだ。だが差出人の部分が無記名になっているメールは初めてだった。

「すげーな」

手がこんでんなー。こんな事も出来るんだ・・・

普段ならば開きもせずに迷惑メールフォルダ行きだが、今回は興味が湧いて、メールを開封した。まずは本文に眼が行く。

いつまで待てばよろしいのでしょうか？

勇者様はどうなったのでしょうか？

???

なんだこりゃ？ リンクがあるわけでもないみたいだけど・・・

待つ？ 勇者？

なんだなんだ？ 異世界転生フラグか？ キタコレ？

彼は数秒どきどきして待つてみたが、残念ながらいきなりモニターに吸い込まれたり、メールの文字が急にうねうね動き出す事もない。

「もちろん分かってましたとも・・・」

彼は誰にともなくそう呟き、ちよつと恥ずかしがりながらメールを右クリックする。

だが右クリックメニューからでは、ソースや差出人についての情報を調べるコマンドは出てこない。ソースを見る気ならば、上のメニューメニューから、表示・メッセージのソースを選択する必要があるのだが、彼は、まあ良いかとソースを調べる事を諦めた。と言うのも彼は自分がソースを見ても何をどう見れば良いのか知らない事を知っているのです、何となくメニューを呼び出してはみたものの執着はしなかったのだ。

返信する気は無いが、取り敢えず返信ボタンを押してみる。メール作成用のウィンドウが開くが、その宛先は自分宛になっていた。実は俺が知らないうちに自分宛にメールを書いていた!? 訳ないか・・・

これはサンダバで宛先を決めない内に一旦保存した下書きに対して返信ボタンを押すと、宛先が自分になる事を経験で知っていたので、特に驚かず単に本当に差出人が分からない状況なんだな、とだけ彼は理解した。

しかし・・・

「勇者かー」

彼はふと一年前の事を思い出した。それは苦い、いや甘く苦い思い出だ。

彼は身悶えしトラウマを堪能しながら、メールを迷惑メールに指定した。

しかし話はそれで終わらなかった。

それから三日間、彼は憂鬱だった。何故なら差出人不明のメールがとんでもなく大量に届くのだ。それらは迷惑メールフォルダに直接行くとは言え、一回の受信時に数百という数のメールである。もはや迷惑だなどか言う感情はわからない。正直怖かった。

試しに最新の差出人不明メールをおそるおそる見ると、

勇者様がいらないなら私はどうしたらよいのでしょうか？

定めを果たす事ができぬなら、いつそ私を・・・

プロバイダに連絡し、件のメールを止めて貰うように話をしたが、メールサーバーにそのようなメールの痕跡が無いと素気なく告げられる。

うひい！、怖えええ！、ホラーかよ！。と背筋が冷たくなるが、プロバイダのお姉さんが言うには、類似例を聞いた事も無いしハッキリとは分からないが、ウイルスじゃないかという話だったので、彼はOSのリカバリディスクを取り出し、祈るような気持ちでクリンインストールをかける事にした。

．
　　いったい何なんだ・・・本当に呪いじゃなければ良いんだけど・・・
　　てか勇者？無理矢理話を終わらせた呪いなのか？・・・

彼は一年前考えた小説の設定ノートを開き、当時自分で考えた設定に眼を通していく。

異世界転生者の設定、魔法の設定、世界の設定、種族の設定、そして複線以外では使わなかったクラチカの生命体を見守る神であり、魔力の根源でもある四体の竜神の設定。特にその中でも異世界転生者たる勇者と結ばれ、勇者がクラチ力に残る要因となるはずだった水を司る龍神。

彼は龍神についての設定を見た時、何かを感じた。

「！・・・これか？」

自分でも訳の分からない事を言っているな。とは思いつつも自らが感じた感覚を打ち消す事が出来ず、取り敢えずこれをどうにかしようと思える。

龍神の設定について消すか？ いやそれも余計に祟られそうだな。

龍神については触りたくないから、勇者を変えるか。とにかくハッピーエンドにしよう。

”勇者に名前を与えられ結ばれる”に線を入れて消し、新たに、勇者が元の世界に帰った後に来た異世界転生者と結ばれる。と書き換え、FINと呟く。

そしてちょうどその時、OSのインストールが終わった。

以降、彼の元には差出人不明のメールは二度と届かなかった。

ユーフランは百年間ずっと神に祈っていた。

既に神の書いたラインから外れてはいても、神の定めたルールがユーフランを縛っていたのだ。

思いがけず名を、そして自我を得て後、すぐに勇者の存在を探したが、世界のどこにも存在を感じられなかった。”勇者と会い、何かをしなくてはいけない”それだけがユーフランの全てだった。

ユーフランに名前を与えた者達は、ユーフランがいるジャングルの奥地にある巨大な深い湖の畔に神殿を作り、ユーフランの事を神として崇めていたが、ユーフランはその力で結界を張り、ずっと引きこもって神に訴え続けた。

「いつまで待てばよろしいのでしょうか？」

「勇者様はどうなったのでしょうか？」

「何故勇者様は来られないのでしょうか？」

「何故お答えいただけないのでしょうか？」

「私は何故勇者様にお会いしなければいけないのでしょうか？」

「私の定めは変えられないのでしょうか？」

もしその姿を他の人が見たのならば、敬虔な祈りを捧げているように見えただろう。

だが、自我を持ってしまったユーフランにとっては敬いはなく、ただ必死なだけだった。

このまま更に時が過ぎれば、いずれ自らを縛るルールとの齟齬により、暴走する事になるだろう。水の魔力の根源たる自分の暴走。水の魔力が無くなっても水そのものではないため水が無くなる事はないが、暴走すれば全ての水が劇薬と変わらぬ物になってしまう。それは生命体の死と同意義だ。生命体を見守る役目を定められたユーフランにとって、それは決して看過出来ない事だった。

だが、もう限界が近かった。諦念に捕らわれつつも、しかし一縷の望みに縋って、いや全ての望みを掛けて、ユーフランは最後の願いを届けた。

「定めを果たす事ができぬなら、いつそ私を無くしてください。勇者じゃなくても良い。救いを御使わし下さい。」

いつもの様に神からの返事はない。

ユーフランの理性が暴走へと切り替わろうとした瞬間。

目の前に人間がいた。

その時ユーフランの運命が変わった。

第一章 神と龍とサラリーマン その八（後書き）

12月24日 一年間ずっと神に祈っていた。 >百年に修正

第一章 神と龍とサラリーマン その九

第一章 神と龍とサラリーマン
その九

「つまりじゃ、可憐にして美しく健気でボインボイン。大和撫子イコール儂とゆうても過言じゃないどころか、お釣りが国家予算位くるほどきゅうとかつせくしいで、もいっちょボインボインな儂の目眩めく色気のぴんくたいふうんに、神の奴めもめるめる。おっばい！。おっばい！。大事な事じゃから二回言いました。んで、その結果、東司が現れたという訳じゃ」

「……なんて言うか、色々突っ込みどころはあるんだが、その言い方だと、おっばいのせいで転生させられたってことになるぞ……」

「うむ……。苦しゅうない。東司の憤りはよお分かるからの。ほれ、恨みをはらすと言う名目で儂の乳を好き放題するが良いぞ？。東司はほんっにおっばいが好きじゃの」

やれやれじゃと腕を組んで胸を寄せて上げるユーフラン。

「だーからー！。うがあああ！。確かに嫌いじゃあない！。

それは認めよう！！。むしろ大好きだ！。ぷっはー！、このおっばいの為に生きてるよなー。とか、当然飲むなら乳番絞り生中中だよね！。って社長とおっさんギャグで盛り上がる位大好きだ！！」

東司は「だがな？、それはそれとして」と言いつつユーフランをビシッと指さす。

「これは、絶っつ対、謝罪とは言わねー！！！」

「むうう……。じゃがのう東司……」

なんだか申し訳なさそうな顔でユーフランが言う。

「それではおっばいが好きなのか、おっさんギャグが好きなのか分からの？」

「そおおんな話してるんじゃ、ねー！ー！！」

東司の慟哭とユーフランの愉悦に満ちた笑い声が湖底に響き渡る。

「大体、大体だな！、俺がくるまで龍の格好だったんじゃないのか？。それでボインボインとかお色気とかなんの話だ！？」

「むうう。それはあれじゃ東司。龍ふえちから見れば辛抱たまらんかったじゃろうということじゃ」

「神様どんだけレベルたけー変態なんだよ！」

「こらこら、異種族の美的感覚を変態呼ばわりは褒められんの？。それに変態とゆうなら東司が昔の彼女n・・・」

「わ、わー！ー！！。ごめんなさい。ごめんなさい。もうそれは許して！！。いやー龍良いんじゃないっすかね。全然問題ないっすよ！」

「なんじゃ？、東司も龍ふえちかえ？。東司はほんっにレベルが高いのう。」

満面の笑みでいじってくるユーフラン。

「もう・・・、それでいいです・・・」

東司は泣きそうになりながら、がっくしと肩と落とすのだった。

今まで東司以外にユーフランの笑顔を見た事がある存在はいないというか、対話した事自体東司が初めてだ。だからそれは誰にも、本人にも、ましてや神ですら判断がつかないだろうが、ユーフランは本当にハイテンションだった。有頂天だった。生まれて初めての会話を心底楽しんでた。

ユーフランは最初に東司を見た時、自らの宿命が書き換わり、この男が自分の運命になったのだと気づいた。だから東司の趣味に合う見た目。口調。性格の傾向を取得したのだ。それはユーフランにとって宿命であり、龍神としての義務だった。東司には東司から知識を貰ったおかげで暴走は解除されたと、もう大丈夫じゃ、と本当の事を伝えてはいないが、実質問題として東司と結ばなければ、また暴走するだろうし、今の感情を知った今となっては、今度は百

年も耐えられないだろう。

だが、ユーフランは東司をからかいながら思う。

僕は東司と結ばれたい。

神のルール？。義務？。そんな事もうどうでも良い。東司の知識に”一目惚れに理由は無い”という言葉があつたが、僕の一目惚れには理由がある。ただそれだけじゃ。

確かに神のお仕着せじゃったり、吊り橋理論じゃったりするかもしれないが、この楽しい感覚、愛しい感覚、東司に想って欲しいという気持ちに違和感など無いのじゃから。

ならば、それが僕の心で問題はない。

絶対に東司を落とすのじゃ。

東司に義務ではなく求められて結ばれるのじゃ。

欲しがります。番うまでは！。じゃ！。

おつと、とはゆうても番つてからも欲しがるのがの、とクスクス笑いながら自分で自分に突っ込みを入れるユーフランだった。

「あー！もう謝罪は良いよ。許す許す。むしろ俺が許して欲しいくらい許す。」

だからレベル高い呼ばわりは勘弁してください、と呟きながら姿勢を正す。

「で、謝罪は置いといて、とにかく質問なんだけど、俺は元の世界には戻れるの？」

だがユーフランさんはすぐに質問には答えず、口元に手を当てて何やらぶつぶつ言っている。

「むうおかしいの・・・、これだけ言えば、『あーコン畜生！。こうなりややってやらあ！』、『あーれー（ぽっ）』となると思ってたんじゃがの・・・。」

「え？。何？。どうしたの？」

「いやいや何でもないのじゃ。元の世界だったかの？。少なくとも僕一人の力では無理じゃの。」

「ん？。一人じゃなければ出来るの？」

「あくまでもかもしれん、じゃよ？。僕は水の魔力を司っておるが、他に土・火・風を司る竜神がおるのじゃ、そやつらの力が借りれば異世界移動が可能かもしれん。と言った所じゃ」

「地水火風・・・、四大元素つてやつか。あと三人と考えれば、七個タマ集めるよりは少ないけど、協力してくれるように説得付きと考えると、ハードル高いのかな？・・・」

ユーフランはそれを聞き、僕は絶対に協力せんから高いと言うより不可能じゃがの・・・と横を向きつつこっそり呟く。

「その三人の場所つて分かるの？」

東司は自らの予定を根本から否定する最大勢力が目の前にいるとは露とも知らず、すまし顔をしている最強の敵対勢力に向かって質問する。

「というかじゃ、その前に一つ大きな問題があるんじゃよ。」

「え？、まだなんかあんの？。龍だけにクエストしないとダメとか？。まさかバスター？。協力して欲しければ俺に勝ってみろ！」

とかだつたら泣ける・・・。俺は低レベル勤め人なんで99まで程遠いよ？。」

「99までいっても、職業勤め人が戦うのは無謀じゃろうな。いや勇者でも賢者でも無謀な事は同じじゃがの・・・そうじゃのう、逆に最終形態のグレン ラガンにはまるで勝てる気がせんのだ。」

「無理だよ！。どこまで突破しなきゃダメなんだよ！。俺を誰だと思つてやがる！。だよ！」

「つかまずにはコアドリルが無いと穴掘り東司にすらなれんぞ。」

「最後の”だよ！”に照れを感じるのう・・・。まあそれは置いてじゃ、問題というのは、東司がどこから来たのか分からんと言ふ事じゃ」

「どこ？・・・。地球だけど・・・つてその情報だけじゃ無理なこと？」

ユーフランは大きく頷き言う。

「さつき僕は東司がここに来た時の事を、何の予兆も余韻もなく突然現れた、とゆうたと思うんじやが、予兆や余韻があれば元の世界を特定できたやもしれんが、現状まるつきり手がかりなしじや。言うならば検索機能無しの直URL打ち込みで、名前すら分からんサイトを探すような物じやの」

東司がその手の打ち様の無さに、うげつと呻く。

「それにの、東司がこちらに来た時の手法が良く分からんのじや。例えば神が東司を二人に分けてそのうち一人をこちらに送ってきた場合、戻れたとしてもそこには既に東司が普通に暮らしておる可能性もあるし、逆に単に失踪扱いかもしれん。戻ってみんと分からんの。シュレディングアの猫みたいな物じやな。あとは時間の問題もあるやもしれん。つまり戻っても既に十年・百年と時代が違つとる可能性もあるということじや。そう言う意味では東司には残念じやが、戻るといふのは余り現実的な選択肢ではないのじやよ」

「そーか・・・、戻れないのか・・・」

東司は、思ったより全然ショックがあるんだな、と呟いて布団に倒れ込む。

ユーフランは東司の翻意を願って一気に説き伏せるつもりだったのだが、自らの目論見がうまくいってない事に焦った。いや、と言うよりも何が何故うまくいってないのか分からなくて焦ったと言っべきだろう。

「と、東司？・・・そ、そうじや！。寝るなら添い寝でもどうじや？」

「・・・あーごめん。ユーフランさん。ちょっとだけ一人で考えさせてもらえるかな？」

「あ・・・・・・うん・・・」

東司は天井を見つめたまま部屋に残り、ユーフランは頂垂れたまま部屋を出て行った。

ユーフランは寢室を出てから居間のちゃぶ台に突っ伏すまですっ

と頂垂れたままだった。いや、突つ伏しても頂垂れているのに変わりはないか。

彼女は今、恥ずかしかった。後悔していた。反省していた。

自らが余りにも浮かれていて、自分の目的、自分の気持ちを成就させる事しか見えていなかった事に気がついたからだ。

だが、あえて第三者的視点で言わせて貰えば、今回の事ははしうがない事だっただろう。何しろ東司の知識を吸収しているとは言え、舞い上がるのも初めて、他人の気持ちを考えるのも初めて、そして自分を省みるのも初めての経験なのだから。

人間の感情にマニュアルはない。一足す一が所詮概念の上でしか正しくないのと同じで、人間の感情の動きを決まり切ったパターンにはめる事は出来ない。ユーフランは東司の知識に非常に大切にしているモノ（つまり人間関係であったり物であったり地位とかだ）が無かった事で勘違いをしたのだ。

実際の所、東司の知識には、彼にとってそこまで大切なモノというカテゴリーは無いが、しかし人は生きている限り、大なり小なり大事なモノ、気に入っているモノが必ず生まれる。例え小さなモノでも、そう言ったモノが集まれば大切なモノが無いからと言って、決して軽視できる事ではないだろう。大体が急に問答無用で見知らぬしかも帰れない場所に連れ去られて、帰りたくないと思う人間は言うほど多くはないはずだ。

もしユーフランが別の世界に飛ばされたとしたら・・・

例え神のルールが無くとも、泣き悲しむだろう。暴れ狂うだろう。どうやってでも東司の元に帰ろうとするだろう。だと言うのに、如何に会話を楽しむのか。どうやってたら東司の気が引けるか。なんとかしてでも東司に帰るのを諦めさせるか。という自分の事しか考えていなかった。

「僕はもつと、東司の気持ちを考えるべきじゃった。」

その後悔はユーフランの心を強く締め付けた。
だがどうすれば良かったのか。

東司を帰す事はとてもじゃないけど耐えられない。

それに自分の気持ちを除いたとしても、この身はルールに縛られている。

そんなユーフランの反省と義務と欲望の三竝みの葛藤ががいよいよ五時間に及ぼうという頃、彼女は一つの結論を無理矢理だした。

でも！、それでもじゃー！！

嫌じゃー！、絶対に嫌じゃー！！

離れとうない！、帰しとうない！！

話したい！、睦み合いたい！！

一緒にいたい！！！！

ユーフランは立ち上がり寝室に戻っていく。

彼女は言わない、使わない、と決めていた神のルールについて話そうと思っていた。

東司が帰ったらこの世界が減ぶと、その罪悪感の鎖に繋いでしまおうと決めていた。

客観的に見れば、東司が元の世界に戻るのはとても難しく、時間を置けば諦めるだろうから待てばいいだけなのだが、それでは自分の方が心代わりしそうだったのだ。

ユーフランは意を決して寝室の襖を開ける。

部屋から東司の声が聞こえてくる。

「ギガア ドリルウウ ブー……」

東司とユーフランが見つめ合う。

東司の顔が青くなり、赤くなる。真っ赤っかだ。

ユーフランの顔は変わらない。動かない。いや動いた。

ユーフランの瞳から涙がこぼれていく。

そんなに元の世界に戻りたいんじゃないの。

グレン ラガンまで天元突破してでも帰りたいんじゃないの。

「いや、あのこれは・・・、なんというか・・・」

東司が真っ赤な顔で焦って言い訳を始めるが、ユーフランはそれを遮って、自らの望みを裏切って、心からの言葉を伝える。

「安心するのじゃ東司。儂が絶対に元の世界に帰すよ。」

ユーフランは泣きながら微笑んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3887z/>

龍の御使い

2011年12月25日15時46分発行